

高等学校1年生の英語の授業における生徒一人一台パソコンを活用したプレゼンテーションと英語力の向上について

音部 みはる

概要

高等学校において、今日まで様々な教育の取り組みがなされてきたが、やはり ICT が入ってきたことは、その中でもひととき大きな変革となるのではないかと考えている。またその有効的な活用が大変大きなチャンスにつながるとも感じている。

そのようななかで今回、大阪府立の高等学校において生徒ひとり一台のパソコンを活用しながら、グループプレゼンテーション活動を行った。そして、生徒の自発的かつ協力的に学ぶ姿勢や発表時の態度から、その効果を大いに期待した。その効果を図り客観的に示すために、生徒にアンケートを実施して、その内容を分析・考察した。また分析が一方的なものにならないよう、担当した英語教員の評価や観察結果も考慮に入れた。

結果は概ね良好なものであり、実践してよかったと感じている。ICT を活用することで、従来であれば時間的制約や予算の関係でできなかったことが容易にできた。そしてその分本来の活動に注力でき、よりよい成果につながったと感じている。また、1年間をとおして長期的に取り組んだことで、生徒は自身の成長や学ぶ力の向上を感じていることもわかった。

しかし、まだまだ改善の余地があり、また研究発表時には、ご出席の先生方から貴重なご意見やご助言をいただいた。今後 ICT をさらに活用し、英語力向上につなげるために、引き続き研究を重ねたい。

状況と取り組み内容

高等学校1年生のコミュニケーション英語Ⅰの時間に、生徒一人一台パソコンを活用しての英語によるグループプレゼンテーションを、1学期、2学期、3学期と、年3回行った。対象は1年生6クラスの全員であった。

英語プレゼンテーション専門の授業があるわけではなく、コミュニケーション英語Ⅰの授業の一部として取り組んだ。準備に費やした授業時間は1・2学期が50分×3時間、3学期は50分×4時間で、プレゼンテーションにはまた別に50分×1時間を費やした。(当該高等学校では50分授業を実施)

なお、成果を図る方法として生徒による自己評価を採択した。鹿毛雅治先生の言及によると、

フィードバックについては外山(2013)が運動学習における KR (knowledge of results) と自己評価の効果について検討している。ゴルフのバッティング課題を用いて大学生を対象に実験的検討を行った結果、高頻度のKRはパフォーマンスを向上させるが、自己評価しない群ではその効果が持続しないのに対し、自己評価する条件では習得されたスキルが持続するという相互作用が見られた。

とあるように、自己評価が学習内容の定着につながるのではないかと考えたことも理由のひとつである。

なお、実施内容は次のとおりで、教科書の内容に準じたものになっている。

1学期：学校制服 pros/cons データを複数用いて意見や提案を述べる

2学期：世界遺産 日本の世界遺産から一つ選ぶ

◆世界遺産に選ばれた経緯と理由 ◆地理的特徴や歴史 ◆抱える問題点 ◆(自分たちが考える) 解決方法
◇受動態と現在完了時制

3学期：宇宙旅行 (宇宙開発)

◆行程 ◆できること ◆オプション

◇仮定法過去

できるようになったこと

①英語発音チェック ②英語スペル・文法チェック ③情報収集 ④スライドの作成 ⑤写真や動画の利用
⑥グラフ等資料の作成 ⑦発表資料のグループ内共有 ⑧授業内外でのグループ活動・練習

ICT を活用することで、生徒は自分が取り組みたいときに、効率よく練習や準備に時間を費やすことができ、その分より良い内容のプレゼンテーションへとつなげることができたようである。

アンケートの内容

2学期と3学期のプレゼンテーション実施後に、項目を大きく3つに分けてアンケートを実施した。

ひとつめは学習効果についてである。英語に関する力と、学習活動全体において求められる力の両方について

尋ねた。その理由は、英語だけではなくほかの教科にも生かせる力を育成すること、とりわけ次年度(2年生)で本格的に取り組むことになっていた「総合的な探究の時間」で活用できる力を伸ばし、教科横断の取り組みも目標のひとつにしていたからである。

英語の力としては、1. 英単語力 2. 英文法力 3. 英作力 4. 発音・音読力 5. リスニング力 6. 英語総合力 を項目とした。またそのほかの力として、7. グループワーク力 8. 工夫する力 9. 考える力 10. 探究力 を項目にした。

そして1～10については「ほとんど高まらなかった」「あまり高まらなかった」「普通」「少しは高まった」「とても高まった」からひとつ選ぶ形式にした。

次に、項目11として、テーマの内容について知識や関心が高まったかを問い、「全然高まらなかった」「あまり高まらなかった」「変わらなかった」「少しは高まった」「大いに高まった」「もっと学びたくなった」を選択肢とした。

それから項目12. としてこのようなプレゼンテーションの取り組みは今後も続けたほうが良いかを尋ね、「全く思わない」「あまり思わない」「どちらでもよい」「まあそう思う」「とてもそう思う」を選択肢とした。

なお、どの項目においても自由記述欄も設けた。また、アンケートは任意であり、項目によるがほしい2学期は128名、3学期は127名の生徒が回答した。

その結果、概ね半数以上の生徒が「少しは高まった」か「とても高まった」を選んでおり、学習効果を実感していることが分かった。ただし、5. リスニング力については半分に満たず、今後の課題となった。

英語以外の力である項目7～10についてはさらに高く、項目によるが60～80%近くの生徒が、同様に効果を実感していた。さらに項目11のテーマ「世界遺産」や「宇宙開発」の知識や関心については、2学期は77%を超える、3学期は67%を超える生徒が「高まった」と感じており、さらに2学期は12%近く、3学期は17%を超える生徒が「もっと学びたくなった」と答えている。また、項目12については、2学期は60%を超える、そして3学期は68%を超える生徒が「そう思う」と答えている。これらのことから、ICTを活用したプレゼンテーションへの取り組みをとおして、生徒は、英語のみならず多方面にわたってより力を伸ばし、また知識や学ぶ意欲を高めて、その効果も実感していると言えるのではないだろうか。

なお、生徒の学力にかかわらずこのような成果が得られたことを研究発表では説明した。また、アンケート2回分のそれぞれの具体的な人数や割合についても表を用いてお示ししたが、この **Proceedings** においては、紙面の都合上、概略を記載するにとどまらせていただいた。

課題と今後の取り組み

全体的に成果が得られていると感じる結果となったが、文法事項の定着については十分とは言えないものとなった。2学期には受動態と完了時制、3学期には仮定法を用いてプレゼンテーションを作成・発表を行ったが、状況に応じて正しく文法を使いこなしている生徒が多いとはいえない状況が見られ、また他の担当教員からも同様の報告がなされた。今後はその点を改善できるような授業や取り組みを計画したい。そしてその改善につながり得るものとして AI によるライティング添削をあげた。そして、その正確性やそれを用いる学習者の意欲度合い、さらには成果についても考察していきたいと考えている。

今回のプレゼンテーション活動において、生徒へのアンケートや聞き取り、あるいは授業時の観察から感じた課題のひとつに、英語作文の指導の充実がある。スクリプトやスライドを作成しているときに、その英文の添削が早ければ早いほど良く、また添削者とのやり取りも大切なプロセスのひとつであると感じた。また、研究発表時に司会をされた兵庫県立大学教授の寺西雅之先生は、理想の状況は学習者のすぐ近くにネイティブスピーカーがいて、その場で添削や説明をしてもらえるものではないか、と端的に表現してくださった。

しかし現状では、ひとつの教室において英語教員はたいてい一人であり、ネイティブスピーカーを全ての教室に伴うわけにもいかず、添削にはどうしても時間がかかってしまう。ライティングの機会を増やしつつ、即座にフィードバックが得られるという理想の形に近づける方法のひとつとして AI を活用してはどうかと考えた。

まとめ

ICT を活用することで英語のプレゼンテーション活動がより充実し、今まで以上に生徒の学習への意欲や様々な力の向上、意欲の高まり、そして主体的な態度が見られたと思う。今後もさらに実践と研究を重ねたい。

(引用文献)

鹿毛雅治 『学習動機付け研究の動向と展望』教育心理学年報 第57集 pp.160 2018年